

シクラメン葉腐細菌病の発生推移について

1 試験のねらい

シクラメン葉腐細菌病は1981年に報告されたエルウィニア・ハービコーラによって生ずるシクラメンの新しい細菌病で、その発生生態や発生機構はほとんど解明されていない。したがって、病原が明らかになったとはいえ、防除対策は困難な状況にある。そのため、本病の発生生態解明の一つとして、現地における発生推移を明らかにし、防除時期策定の資とする。

2 試験方法

1980年のは種期から1981年の出荷期までの一作期間について、南那須町、栗野町及び二宮町の一般栽培温室内で、同一株の本病発生状況の推移を供試株105株について調査した。

3 試験結果及び考察

南那須町では、は種期から発生が認められた。しかし、仮植から鉢上げの間は病徴は認められなくなった。鉢上げが行われると再び発生し、7月に鉢替されると急増し、枯死株も発生した。その後8月は増加傾向で推移したが、9月定植後やや減少し、10月再び増加した(図-1)。

栗野町では、は種期から発生が認められたが、鉢上げまでの間は発生量はほとんど変動せず推移した。鉢上げ後はやや増加したが、6月は減少した。7月は再び増加し、鉢替えが行われると急増し、枯死株も発生した。その後8月は増加傾向で推移したが、9月はやや減少し、定植が行われると再び増加した。(図-2)

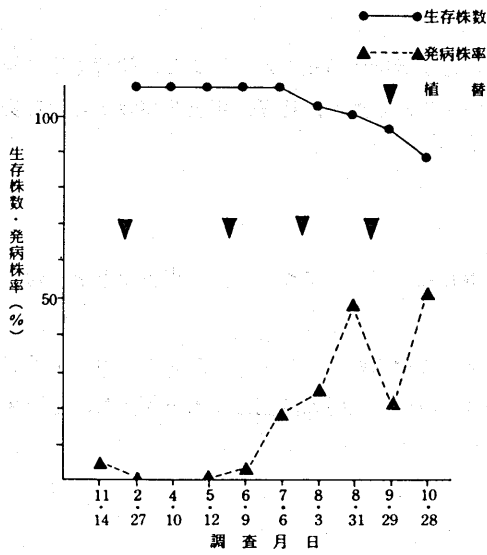
二宮町では、は種期から発生が認められ、鉢替えまではほとんど変動のない発生で推移した。鉢替えが行われると急激に発病増加し、枯死株も多発した。その後も出荷期まで増加し続けた(図-3)。

このように本病は、は種期から出荷期まで、栽培全期間を通じて発病が認められ、発芽から植替えが行われるまでは少ない発生で推移するが、植替えが行われるたびに発生が増加する。特に7～10月の高温期に植替えが行われると多発する傾向が認められた。いずれの温室でも発芽直後から発生が認められたが、用土が消毒されていることから、種子による伝染が考えられる。また、植替え後に増加する傾向が認められたが、本病は傷口があると感染しやすい病害であることから、植替えによって生じた傷口から感染し発生増加したものと思われる。更に、汚染用土や汚染鉢からの伝染も考えられる。

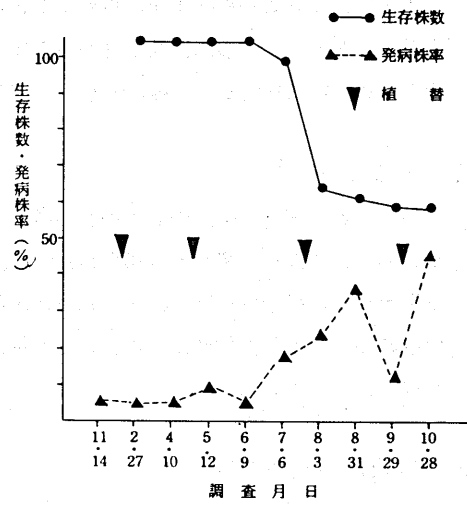
4 成果の要約

シクラメン葉腐細菌病の発生は、は種期から出荷期まで栽培全期間を通じて認められ、植替えのたびに増加する。特に高温期に植替えが行われた後に多発する傾向がある。

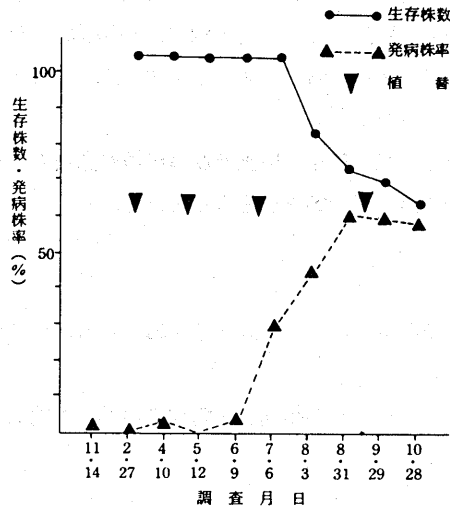
(担当者 病理昆虫部 木嶋利男 花き部 峯岸長利)



図一1 発生推移 (南那須町)



図一2 発生推移 (栗野町)



図一3 発生推移 (二宮町)